

朝鮮王朝が編纂した高麗史書にみえる元の日本侵攻に関する叙述

孫衛国

(南開大学歴史学院、中国天津、300350)

[原文は中国語、翻訳：宋剛（北京外国語大学）]

要旨：

朝鮮王朝は建国初期から、編年体で『高麗史』を編纂しようと努力を重ねてきたが、実現できなかった。李朝世宗の勅命により、高麗朝の歴史を紀伝体で編纂し、139巻の『高麗史』を仕上げ、朝鮮王朝に正統性を付与した。『高麗史』における元の日本侵攻に関する記載は、高麗の自主性を強調し、高麗が元王朝の要求に巧妙に対応したことを表わし、高麗が提供した軍隊の食糧、人力などを細かく記録している。そして、高麗を裏切って元王朝に投降した高麗人を「反人」と見なして、「叛逆伝」に収めたことから、高麗が宗藩関係のもとで独立自主を求めようとした意識と努力が伺える。『高麗史』章節「忠烈王世家」と「金方慶伝」には、元の日本東征の歴史について類似の記述がある。高麗の将軍は戦争の勝負を左右する肝心な人物であるが、モンゴルの最高司令官は専断的であり、他人の意見を聞かず、ひたすら自分の意見を通そうとした。その上、「暴風雨」に遭って東征を失敗に導いた。『元史』と日本史書と比べて、『高麗史』に見える元の日本東征に関する記述は極めて偏っている。東アジア三国の歴史事件に関して、「一国史」の枠から抜け出し、「東アジア史」の目線から考査してから初めて、歴史の真相に近づくことができる。

キーワード：『高麗史』、元の日本東征、フビライ、忠烈王、洪茶丘、金方慶、「叛逆伝」、歴史編纂

至元十一年（1274）と至元十八年（1281）に、フビライは二回にわたって日本遠征に踏み切った。これは近世東アジアにおける歴史上の一大事件であり、後世に深刻な影響を与えた。元の藩属国として、高麗王朝は元の日本遠征において重要な役割を果たした。元は高麗に日本遠征のための造船や物資の用意を強要した。同時に、高麗王朝も元と協力し、遠征軍を派遣した。朝鮮王朝の鄭麟趾によって編纂された『高麗史』での関連記載は、高麗王朝が日本遠征で果たした役割を考査する上での肝心な資料であり、また朝鮮王朝の遠征に対する見方を検討する上で肝心の根拠である。『高麗史』に見える日本遠征に関する記述は「元宗世家」、「忠烈王世家」、「兵誌」や「金方慶伝」などの章節で散見される。内容はバラバラだが、詳しく分析すれば、日本侵攻の理解に繋がると思う。また、戦争時、元の要求に対処して行われた高麗の巧妙な対応を分析することにより、元王朝と高麗の宗藩関係の特徴を明らかにしたい。

#### 一、朝鮮王朝が『高麗史』を編纂した意図と経緯

1392年、李成桂は高麗の若い王から高麗王位を篡奪して高麗王を称した。朝鮮王朝の正統性を確立するために、李成桂は即位するとすぐさま明へ使者を派遣し、「権知国事」の名義のもとで、「朝鮮」と「和寧」の二つの名前を持ち出し、積極的に明を宗主とする宗藩関係を築こうと努めた。そして、明の太祖朱元璋から「朝鮮」の国号を使うことを許され、李成桂とその臣下は喜んで受け入れた。かつて、箕氏朝鮮が周武王によ

って朝鮮侯に封じられたという歴史を踏襲して、明王朝の皇帝から冊封を受け、宗主国に承認され、その正統性を確立しようと努めた。<sup>1</sup>同時に、建国の初期から、李成桂は高麗王朝の歴史の編纂を最重要の仕事として、本国の歴史から、新王朝の合法性を見出そうとした。韓国の学者が指摘した通り、「高麗時代の史料を整理することで、高麗王朝の問題を指摘した。これらの問題を克服して確立した朝鮮王朝の正統性を体現するだけでなく、新しい統治理念の方向も確立しようとした。」<sup>2</sup>政治面における要請から、朝鮮王朝も高麗史の編纂を始めた。

最初は編年体で高麗の歴史編纂の仕事を展開した。太祖四年（1395）、李成桂は鄭道伝に『朝鮮王朝実録』などの史料をもとに、編年体の『高麗国史』の編纂を命じ、全37巻の『高麗国史』が仕上がった。今この本は失われている。

「各王朝の実録を集め、検校侍中文仁公閔漬の『綱目』、侍中文忠公李齊賢の『史略』、侍中文靖公李穡の『金鏡録』を集めて編纂する。左氏の編年体を真似て、三年かけて仕上げた。三十七巻である。その書には誤りもたくさんある。大体の内容は、元宗を肯定し、僭越な記載が多いし、後から訂正すべき所がたくさんある。」<sup>3</sup>

史書の編纂はすぐに完成したが、集めた史料の数が限られたし、且つ当時の李成桂に関する記載は事実と合わないと思われ、「僭越な記載が多い」と批判された。しかし、この本の史論は『高麗史節要』に大量に取り入れられ、後世に伝わった。<sup>4</sup>そして、後の高麗史の編纂のための基礎を築き上げた。

太宗十四年（1414）、太宗は春秋館事河侁、卞季良などに『高麗国史』の再編集を命じた。しかし、二年後、河侁はなくなり、再編集の仕事もやむなく止めさせた。世宗元年（1419）、勅命により、編纂の仕事が再開した。三年後（1421）、完成した本を国王に捧げたが、依然として世宗の意に召さない。世宗五年（1423）、世宗は卞季良、柳観、尹淮などに史書の改編を命じた。翌年に、『讎校高麗史』が完成したが、意見が一致せず、発行できなかった。世宗十三年（1431）、世宗は監春秋館事申概、権踰に高麗史料を幅広く集め、高麗史を編纂するようにと命じた。世宗二十四年（1442）八月に、編集の仕事が終わり、『高麗史全文』と名付けた。世宗三十年（1448）に、この史書は初めて印刷された。多くの史料を取り入れたが、主旨が明らかではないから、後年、本の発行は停止した。しかし、この本は『高麗史』と『高麗史節要』の編纂のための、豊富な資料を提供している。<sup>5</sup>

最初の数十年間、朝鮮当局は高麗史の編集の為に、全力を尽くしたが、意に合う史書を得なかった。世宗三十一年（1449）、金宗瑞、鄭麟趾は世宗の命令により『高麗史』

<sup>1</sup> 陳尚勝、『朝鮮王朝が明王朝に対する事大観』、『第三回韓国伝統文化国際学術シンポジウム論文集』、済南、山東大学出版社、1999年、第924ページ。

<sup>2</sup> （韓国）朴仁鎬『韓国史学史』、全莹、金錦子、鄭京日訳、香港亜洲出版社、2012年、第55ページ。

<sup>3</sup> 『東文選』巻93『進高麗史序』、漢城：慶熙大学出版社、1968年。（原文：采摭各朝实录、及檢校中文仁公閔漬『綱目』、侍中文忠公李齊賢『史略』、侍中文靖公李穡『金鏡録』、汇而輯之。仿左氏編年之体、三年而成、為卷三十有七。顧其書、頗有舛誤。至于凡例、以元宗以上、事多僭擬、往往有所追改者。）

<sup>4</sup> （韓国）朴仁鎬『韓国史学史』、第55ページ。

<sup>5</sup> （韓国）朴仁鎬『韓国史学史』、2012年、第57ページ。

を再編修し、編年体を紀伝体に切り替えた。『進高麗史箋』に述べた通り、「凡例は司馬遷の『史記』に従い、大義は皇帝の裁断に準じる。藩国として名義を示すために、本紀ではなく、世家に編入する」。<sup>6</sup>編年体で編纂する場合、朝鮮王朝の正統性を確立しにくい。太祖は建国の当初から、編纂の仕事を始めたが、数代を経て、幾つかの史書を編纂したにもかかわらず、朝鮮国王の意に合うものはない。紀伝体で再編集するしかない。「歴史に対する批判的分析と構造的な理解の面で、紀伝体の記述は編年体より有利であるし、朝鮮王朝統治者が高麗歴史を編纂する目的に当てはまる」。<sup>7</sup>文宗元年

(1451) 八月に、『高麗史』の再編修が完成した。全書は目次 2 巻、世家 46 巻、志 39 巻、表 2 巻と列伝 50 巻からなり、合計 139 巻である。そして、金宗瑞は紀伝体『高麗史』に基づき、編年体で書き直した。翌年の二月に、『高麗史節要』が完成した。全書、35 巻である。二冊の本により、高麗王朝の歴史の編修を通じて、朝鮮王朝の正統性を確立する目的が実現した。

『高麗史』は国王に関する内容を「世家」に編入し、藩属国としての地位を表明したが、宋、元など中国皇帝の年号ではなく、高麗国王の在位年数を以て編年体で記述した。これにより、高麗王朝の相対的独立性を表した。高麗王朝は建国して以来、相次いで五代、宋、遼、金王朝の皇帝の年号を使用していた。高麗の元宗から、モンゴルの年号を使用した。忠烈王によって李成桂の政権が覆されるまで、元王朝の年号を使い続けた。高麗は中国の諸王朝と付き合ってきた。文化の面で、高麗王朝は宋王朝を正統としてきたが、宋王朝との宗藩関係は非常に短い時間しか続かない。そして、宗主国は次々に遼、金と元と変わっていった。高麗王朝は遊牧民族に建立された中国王朝に対して、政治や軍事の面で臣服しなければいけないが、文化の面では自負を持ち、臣服しなかった。朝鮮王朝の官撰史書『高麗史』では、歴代の高麗王の記述が天子を意味する

「本紀」ではなく、諸侯の歴史をさす「世家」となっている。藩王としての地位を表したが、『高麗史』は、中国皇帝の年号ではなく、高麗国王の在位年数を以て編年体で記述した。この折衷の方法によって、高麗の藩属国としての地位を認めながら、完全には臣服せずに、独立自主の意識を持っているという朝鮮王朝の基本的な認識をはっきりと表明した。以上のように二つの意識の結合は『高麗史』編纂の基調となった。

高宗五年(1218)に、モンゴルの軍隊は契丹の残余勢力を追い掛け、高麗に入り、高麗と公式に接触し始めた。まもなく、兄弟盟約を結び、公式に往来する。モンゴルは何度も高麗に財物を強要したから、高麗の不満を起こした。モンゴルの使臣が帰国の途中で殺されてしまい、両国の間で戦争が起きた。1231年から1258年まで、モンゴルは朝鮮侵攻を七度も実施した。高宗四十六年(1259)に、太子王僖をモンゴルへ派遣し、双方が平和交渉を行った。丁度その時、モンゴルの大汗が逝去して、王僖は自らフビライ

---

<sup>6</sup> 『東文選』巻44『進高麗史箋』(原文: 凡例皆法于迁史, 大義悉禀于圣裁。避本紀为世家, 所以示名分之重)

<sup>7</sup> (韓国) 朴仁鎬『韓国史学史』、2012年、第56～57ページ。

を迎えに行った。フビライは即位し、元王朝を建てた。まもなく、高麗の高宗も逝去した。フビライは王僖を高麗まで送って即位させた。王僖は元宗となり、両国の平和の道を開いた。元宗の時代から、フビライは高麗の協力のもとで、日本遠征の準備を始めた。朝鮮王朝は高麗を中心に、歴史の編修を始め、その方針を『高麗史』全体に貫いた。だから、『高麗史』における元の日本遠征に関する記載は朝鮮王朝の「モンゴル襲来」の物語である。

## 二、『高麗史・世家』における元による日本進攻の史料の選択や編纂の原則

元が日本遠征を始める前に、フビライは使者を日本へ派遣し、日本と緊密な関係を築こうと要請した。この過程が長く続いた。初めから、高麗王朝はやむを得ず元王朝の日本東征のお先棒を担いだ。『高麗史』の詳しい関連記述には、やむを得ず、不満である意識が溢れ、また元王朝の威圧のもとで、高麗王朝が独立した姿勢で本国の利益を守ろうと試みた様子が伺える。高麗王朝を中心に、本国の意識と本国の立場を明らかに表明することは『高麗史』編纂の基本的な原則である。主に次の面に表われている。

第一、戦争の準備段階で、元王朝の理不尽な要求に対し高麗がやむを得ず対応したことを全面的に記述している。

元宗七年（1266）、日本遠征の前に、フビライは高麗を経由して使者を日本へ派遣した。高麗人趙彝の密告によって、フビライは高麗と日本の頻繁な往来を知り、使者黒的、殷弘を高麗へ派遣した。そして、使者に持たせた詔書によれば、フビライは高麗に使者と同行するように命じ、命令に違反した場合、元に対する忠実を疑うしかないと脅かした。高麗はやむを得ず、枢密院の副使宋君斐、金賛などを黒的に同行させた。しかし、日本へは到達しなかった。元宗八年（1267）正月に、宋君斐、金賛とモンゴルの使者は巨済松辺浦に着き、「荒波を恐れて」帰った。元宗は宋君斐に黒的と一緒に元王朝へ復命に行き、皇帝に上奏するように命じた。上奏書は幾つかの意味を含んでいる。第一は、使者が日本へ到達できなかった理由について説明する。荒波はきわめて険しいので、使者の安全が懸念された。また、日本人が「頑固で粗野で礼儀知らず」、モンゴルの使者の安全を保証できないから、途中で帰るしかない。第二は、元王朝の皇帝が趙彝の話を聞き、高麗と日本が緊密に往来していると信じていることについて弁明した。とくに「且つ日本は、素より小邦と末だ嘗て通好せず」と強調し、但し対馬島の人が、時に貿易によって、金州に往来するのみであり、それ以外の日本人と一切往来したことがないから、趙彝の進言はうそである。第三に、元王朝の世祖が即位して以来、高麗は深く世祖の仁恤を蒙り、深く心に刻んでいる。「聖恩は天大にして、誓いて報せんと欲す。如しなすべきの勢いありて、心力を尽さざらんには、天日の如きものあり」。<sup>8</sup>少しでも恩返しできればと願っている。これは決意を表す上奏書であり、高麗が責任から逃れるために、弁明する為の上奏書でもあり、外交辞令を羅列したものである。モンゴルは初めて日本へ使者を派遣することは空振りに終わった。当時高麗はこの件に興味がなく、いい加減に済まただけである。

---

<sup>8</sup> 鄭麟趾『高麗史』卷26「元宗世家二」、元宗八年正月癸丑。台北：莊嚴文化事業有限会社、1996年（聖恩天大、誓欲報効、如有可為之勢、而不尽心力有如天日）

モンゴル側も高麗の口実がよく分かった。八月一日、黒的、殷弘及び宋君斐などが罪を問う勅命を持って再び高麗を訪れた。フビライは勅命において、高麗の責任を逃れるための計略を指摘し、高麗のいい加減な態度と不誠実さを非難した。「天命は謀を難んじ、人道は誠を貴ぶ。卿は先後食言すること多し。宜しく自省すべし」<sup>9</sup>と高麗を厳重に警告した。さらに、フビライは日本へ使者を派遣する決意を強く表した。「必ず要領を得るを以て期となせ」<sup>10</sup>、必ず結果を出すまでに諦めない決意を表した。最後に、高麗の「誓いて報効せんと欲す」<sup>11</sup>という言い方に対して、今こそ報効すべき時だと指摘した。元王朝が硬軟両方の手段を用いたから、高麗はやむを得ず、使臣を日本へ派遣し、日本遠征のお先棒を担ぐしかない。

数十日を経て、高麗国王元宗は起居舎人の潘阜を遣わし、蒙古書および国書を持って日本に向かわせた。蒙古書に曰く、「高麗は朕の東藩なり。日本は（高麗に）密邇し、開国より以来、また時に中国に通ずるに、朕の躬に至りて、一乗の使いの似て和好を通ずるなし。尚お恐る、王の国のこれを知ること、未だ審かならざるを。故に使いを遣わし、書を持して、朕の志を布告せしむ。冀わくは、自今似往、通問して好みを結び、似て親睦せん。且つ聖人は至りては、夫れ、孰れか好む所ぞ。王、それ、これを図れ」<sup>12</sup>とのたまう。フビライは日本と使者を派遣し合うという願望を表し、日本に通好を願う国書を出して貰いたいという願望を伝え、「似て親睦せん」。もし日本が元の要求を無視したら、元王朝は軍隊を派遣すると脅かした。同時に、高麗も日本に国書を奉じ、モンゴルに対する見方を伝え、日本に元王朝の皇帝に臣事することを勧めた。よって、元王朝と日本は往来しなかった上に、お互いもよく知らないが、フビライは高麗国王を通じて、日本に使者を派遣し合うという要請を伝え、両国の間で友好関係を構築しようとする意思を表した。高麗国王は両国の媒介にはなりたくないが、モンゴル帝国の高圧のもとで、やむをえずモンゴル帝国の皇帝フビライの詔書と高麗の国書を日本へ送り、使者を派遣し合うように要請した。モンゴル帝国は日本に使者を派遣し、好意を表したが、日本は取り合わなかった。その後、フビライは再び使者趙良弼を日本へ遣わした。

このように『高麗史』の「元宗世家」では、高麗がモンゴルの威嚇を受け、日本へ使者を遣わした史実は詳しく記述されている。その史実には、高麗のやむをえず消極的な態度が隠れている。そして、文章の中には、モンゴル帝国の威力が明らかに表われている。関連の評論がないにも関わらず、幾つかの詔書から、元王朝の威嚇が明らかに伺える。即ち、朝鮮王朝の史官がこの歴史を記述する時に、表した嫌悪の情である。実際には、高麗の使者を通じて伝えたのは単なる前ぶれであり、フビライの日本に対する野心は使者往来に止まる訳がない。

<sup>9</sup> 原文：天命難謀，人道貴誠，卿先後食言多矣，宜自省焉。

<sup>10</sup> 原文：以必得要領为期。

<sup>11</sup> 『高麗史』卷26「元宗世家二」、元宗八年八月丙辰。

<sup>12</sup> 『高麗史』卷26「元宗世家二」、元宗八年八月丁丑。（原文：高麗，朕之東藩也；日本密邇，開國以來，亦時通中國，至于朕躬，而无一乘之使以通和好，尚恐王國知之未審，故遣使持書布告朕志，冀自今以往，通問結好，以相親睦。且聖人以四海為家，不相通好，豈一家之理哉！以至用兵，夫孰所好，王其圖之。）

元宗十二年（1271）正月に、「モンゴルは日本国信使秘書の趙良弼及び忽林赤、王国昌、洪茶丘など四十人を遣わした」<sup>13</sup>。そしてフビライの詔書を持ってきた。彼らはモンゴル帝国が高麗を経由し、日本へ派遣した最初の使者団であり、実際に二回に分けて派遣されている。一回目は、趙良弼を国書使者として日本へ遣わし、そして趙良弼は高麗の「寵臣」康允紹を同行させた。二回目に、忽林赤、王国昌、洪茶丘などは予備使臣として、兵士を率いて海上で待機した。注意すべきなのは、もともと洪茶丘は高麗人であり、彼の父がモンゴルへ帰服したから、彼はモンゴルの将軍になった。史料の中に、洪茶丘が郊外へ迎えに行った高麗国王元宗を見ても「拝謁しなかった」<sup>14</sup>ことを特筆した。即ち、洪茶丘が臣下として国王へ拝礼しなかった。この件を取り上げ、洪茶丘の傲慢な態度をよく表し、高麗君臣と朝鮮の史官の不満を引き立てた。

日本がモンゴルの使者派遣の要請を取り合わないから、モンゴルは軍隊派遣の準備を開始した。出兵する前に糧秣を準備しておくべきである。糧秣を準備するために、忻都は軍隊を率いて高麗へ屯田した。そして、高麗に協力してもらい、三千匹の牛、農耕機具や種などの用意を求めた。その後、高麗は殿中監郭汝弼を派遣し蒙古へ陳情書を提出した。モンゴルに困窮を訴え、要求を一つずつ断った。

中書省から公文書を承り、元軍が鳳州に屯田し、農耕用牛、器具、種や軍隊用食糧の準備の命令を受けた。農耕用牛は、前に上奏した通り、弊国の都には家畜を農耕に使う人が殆どいない。他の地域には家畜を飼う農耕民がいるが、多くても一か二匹に過ぎない。貧乏な人は大抵農具（耒耜）を以て、或は牛を借りて耕作する。今、牛等の家畜は、全羅道食糧の運輸のため、餓死や疲労で大半を失った。元来弊国の農民は多くの農耕用器具を持っていないが、要求を達成できなくても、出来るだけの数を揃えるように努めた。種は、農民が毎年耕作して、租税を納めて、食糧とする。・・・軍隊用の食糧について、弊国の貯蔵した食糧は逆賊に奪われたもの以外、全部駐屯する軍隊や馬そして討伐の軍隊に提供し、使い切った。国内外からの賦税や徴用は農民の大負担となり、生計すら問題になったが、さらに、種や餌がたくさん徴用された。秋に軍隊用の数万碩はどこから調達すべきだろうか。<sup>15</sup>

高麗が提出した陳情書は、責任から逃れる為に様々な口実を設けて、困窮を訴えている。『高麗史』では、このような陳情書や、高麗がいかにモンゴルの要求に対応したかをめぐって重点的に記述した。朝鮮王朝の史官は『高麗史』を編纂する時も、宗主国の明王朝に同じ感情を抱いた。元王朝に比べて、明王朝は朝鮮王朝に対してそれだけの物資や食糧を求めてはいなかった。しかし、明朝の初期、高麗に、毎年処女と火者の貢進を求め、宦官を派遣した。それは当時の朝鮮王朝にとって、耐えられない大きな負担で

<sup>13</sup> 『高麗史』卷 27「元宗世家三」、元宗十二年正月己卯。

<sup>14</sup> 『高麗史』卷 27「元宗世家三」、元宗十二年正月己卯。

<sup>15</sup> 『高麗史』卷 27『元宗世家三』、元宗十二年正月丙寅。（原文：承中書省牒，鳳州屯田，農牛、農器、種子、軍糧等事。若乃農牛，如前表奏，小邦京中鮮有畜使者，外方農民雖產之，饒者畜養亦不過一二頭，貧者多以耒耜，或相賃牛而使之。今外方牛畜，悉因全羅道糧餉轉輸，以至飢困，損失者大半。農器，則小邦人民元來未有贍它者，此皆雖不得如數，并當隨力供辦。種子，則百姓趁年畊作，以修貢賦用，其餘以為糧料。……軍糧，則大軍之後，小邦元來蓄積，除逆賊攘奪外，悉因供億留屯軍馬及追討軍馬，罄竭無余。中外臣民征斂者累度，猶不連續，且又泛計種子、葛秣，接秋軍糧凡几万碩，此則何从而致之耶！）

ある。<sup>16</sup>それゆえ、『高麗史』を編纂するときも、その史実を重点的に記述し、藩属国としてのやむをえない気持ちを表しながら、藩属国としての反抗も表現した。その反抗は大した効果を得なかったが、朝鮮王朝が自主意識を持っていて理不尽な待遇に甘んじている訳ではない証拠である。

陳情書だけでなく、またフビライに朝鮮王朝に対する請求を放棄させる為に、断事官・沈渾を派遣し、陳情や請願を繰り返していた。

「百姓は皆皇帝の百姓であり、牛、農耕機具、種など全部徴用されて生計を失ったら、酷い労役を服し疲れきって、苦難に堪えられぬ百姓は餓死するのを恐れている。また、反逆者は豊作であり、愚民たちは反逆者になりかねない！陛下ははじめからこんな状況に至るとご存知なら、必ず、なぜはじめから実情を報告せず、わが百姓をこんな境地に迫るのかと問い詰めるだろう。今実情を報告しないと、将来誰がその責任を取るだろうか。」<sup>17</sup>

この陳情書から、高麗は全力を尽くしてモンゴルの要求を満たそうとする姿勢を表したが、より重要なのは、百姓を代弁して皇帝に困窮を訴えたことである。農耕用牛、機具、種など全部徴用されたら、百姓は生計を立てる道がないから、窮地に追い込まれて、謀反を起こすかもしれない。だけど、「百姓は皆皇帝の百姓である」から、モンゴル皇帝にもそんな事態になってほしくないと信じ、命をかけて陳情し、皇帝に高麗の百姓の苦境を伝える。実際には、再び抗争を表す。

元宗十三年（1272）の正月に、趙良弼は日本から高麗へ戻り、日本の使者十二人を連れてきた。高麗の国王元宗はすぐに、報告と祝賀のために使者を大都へ派遣した。同年の十二月、元は再び日本に帰順を説得するために趙良弼を派遣した。でも、一回目ほどうまくいかなかった。元宗十四年（1273）三月に、趙良弼は日本の太宰府を訪れたが、都に入ることは許可されないから、再び高麗に戻るしかなかった。モンゴルは使者を日本へ派遣すると同時に、忻都と洪茶丘がモンゴルの軍隊を率いて元宗十四年（1273）四月までに、三別抄に占領されていた朝鮮半島東南沿海の諸島を占拠し、珍島、耽羅を平定し、日本遠征の準備を行った。討伐の経緯は「忠烈王世家」に簡略に記述されている。

一回目の日本遠征にあたり、高麗は受動的に元王朝の要求に対応せざるを得なかった。二回目の日本遠征に当って、高麗の国内は積極的に参加し、その意思決定に加わりと試みて、出来るだけモンゴルの將軍の権限を制限し、高麗への影響を最小化する。二回目の日本遠征を決定する時に、高麗の国王忠烈王は大都にいて自ら皇帝の命令を受けた。『高麗史』に意思決定の過程は次のように書かれている。

---

<sup>16</sup> この問題に関して、陳学霖『明王朝の人物と伝説』を参照ください。香港：香港中文大学出版社、1997年。

<sup>17</sup> この問題に関しては陳学霖の『明代人物と伝説』、香港：香港中文大学出版社、1997年。（原文：噫！此百姓皆是皇帝之百姓，乃此农牛、农器、种子一皆收夺，使失其业，则恐百姓决定饥死，其又在此者役烦力竭，不堪困苦。而从逆贼者，靡有歉艰，则焉知愚民有所贰于彼哉！圣鉴若知如此，必曰何不揆力陈实，早达宸所，使我百姓至于此极？然则谁当任其责？）

忠烈王は7つの希望条項を上奏した：一、我が軍は耽羅を鎮戍（鎮守）する兵を以て、東征を補うこと；二、高麗、漢の両軍より、寧ろ蒙軍を以て前線に立てること；三、洪茶丘の職任を加えず、臣も亦、征東行中書省の事を管轄すること；四、小国の軍官、みな牌面（勲章などの類）を賜ること；五、漢の地浜海の者を梢工、水手に充てること；六、按察使（地方行政監察官）を遣わして、百姓の疾苦を見させること；七、臣が自ら合浦に到って、軍馬を閲送すること。<sup>18</sup>

よって、高麗の国王は日本遠征に参加することを非常に重視し、大臣を皇帝に拝謁させ、自ら東征の命令を受けたいと上奏してもらった。他の臣下を通して勅命を受けるのではなく、直接に命令を受けることで、主導権を握ろうとした。戦略の制定と軍隊の派遣について、忠烈王は7つの希望条項を上奏した。一方で、高麗、漢の両軍より、寧ろ蒙軍を以て前線に立てると要請した。船員も高麗の兵士に頼るのではなく、漢の地浜海の者を梢工、水手に充てることにより、高麗王朝の責任を減少する。そして、洪茶丘の権限を抑制し、洪茶丘の職任を加えないと要請した。高麗の国王と洪茶丘は犬猿の仲であるからだ。高麗の国王は閤里帖木儿とともに日本遠征を担当すると要請した。忠烈王の意図は明らかであり、日本遠征において、他人に牽制されたり、日本遠征のため、政敵に権力を握られ、高麗の国政に影響を与えたりするようなことを避けるために、忠烈王は主導権を握ろうとした。『高麗史』はそれに重点をおいて記述している。フビライは忠烈王の希望条項を採用しなかったが、忠烈王の意見は重視した。九月丙辰、モンゴル日本遠征の軍隊を拘束する為に、遠征の元帥府鎮抚也速达賚二关字が来た。「その一……本国の食糧の貯蔵、梢工、水手、一切の軍隊の需要などは、それぞれの人に担当させ、下された命令通りに用意させた。失敗を起こさず、徴用されるのを待つ。その一、取り扱う人の中に、国法を恐れず、放火し食糧を焼き尽くした人がある恐れがある。食糧は大事であるから、それぞれの人に担当させることで、関連規定を公布し、違反する場合は、担当者の罪を問う。」<sup>19</sup>皇帝は忠烈王が提出した7つの希望条項に答えて、日本遠征の将軍たちの行動を拘束し、高麗への悪影響を避ける為に、この二つの規定を出した。『高麗史』にモンゴルの日本遠征の軍隊がもたらす危害は詳しく記述されていないが、忠烈王が第二次日本遠征までに行った積極的な行動から、日本遠征がもたらす危害が伺える。忠烈王が高麗への影響と危害を防ぐ為に積極的に行動を取り、ようやく報われた。

戦争準備の段階において、最初高麗王朝はやむを得ずモンゴルの要求に応え、巧みに対応し、困窮を訴えたが、第二次日本遠征の前に、高麗の国王は積極的に対応し、主導権を握るために行動を取った。これらの行動や変化は『高麗史』に詳しく記述されてい

18 『高麗史』卷 29「忠烈王世家二」、元宗六年八月辛卯。（原文：王以七事请：一以我军镇戍耽罗者，补东征之师；二减丽汉军，使閤里帖木儿益发 蒙军以进；三勿加洪茶丘职任，待其成功赏之，且令閤里帖木儿与臣管征东省事；四小 国军官皆赐牌面；五汉地滨海之人并充梢工水手；六遣按察使廉问百姓疾苦；七臣躬至合浦阅送军马。）

19 『高麗史』卷 29『忠烈王世家二』、元宗六年九月丙辰。（原文：其一……据本国见管粮储船只梢工水手，一切军须，请照验行下合属，如法准备，听候区 用，勿值临时失误。其一，经行去处，窃恐不畏公法之人，放火烧草，事系利害，请照验行 下合属，出榜禁约，如违，罪有所归。）

る。そこから高麗王朝が宗主国の元王朝に対する抗争やお茶を濁す態度が伺える。また、高麗王朝が独立自主を獲得しようとする意志が明らかである。

第二、高麗が戦争のために大量の人力、食糧、馬の餌などを消耗した。それが高麗にまざまな困難を齎したことは『高麗史』に詳しく記述された。

前述したように、高麗王朝は元王朝の様々な要求に対し、口実を設けていい加減に対応した。『高麗史』は高麗のやむを得ない立場を表現しようと試みた。高麗が消耗した物資、直面する困難、日本遠征のために作った戦艦、そして、消耗した人力、食糧、馬の餌などが一々記述され、元王朝の日本遠征のために払った対価もよく表した。例えば「(元宗)十五年の春正月、元は総管察忽を派遣し、三百艘の戦船の建造を監督した。すべての人々を徴用対象とし、高麗の担当者にすべてを任せる……徴用や監督が厳しく行われる……交州道で部夫を任命し、職人など三萬五千人あまりを徴用させ、造船所に派遣する。当時、駅に往来する人が後を絶たず、徴用等の負担が大きく、期限が迫っている。人々を苦しませる」<sup>20</sup>。元宗十五年(1274)二月甲子に、高麗王は別将李仁を派遣し、元王朝に準備の状況を報告させる。今までの準備、消耗した食糧、些細なことまで全部皇帝に上奏し、特に高麗が直面する困窮を表明し、さらに百姓の困窮を訴え、最後に「毎年の徴用と税収は相次ぎ、期限もなく、人々はどうすることもできない! 百姓に同情し、税収等を減免し、子孫後代を恵ませる」<sup>21</sup>と懇願した。減免を懇願し、民力を養うことにより、百姓を苦境から脱出させようとした。

高麗はよく元王朝に経済のことを報告した。高麗は常に提供した食糧の数を元王朝に報告し、一つ一つきちんと整理した。忠烈王三年(1277)に、高麗は使者を派遣し、中書省に上書し、「弊国は元七年以来、珍島、耽羅を討伐し、東征大軍の食糧は百姓に徴収し、そして、合浦鎮辺軍、耽羅防守軍隊、塩白州帰順の軍隊と闊端赤のために、一年間食糧一万八千六百二十九石二斗を提供し、また牛や馬の餌を三万二千九百五十二石六斗も提供した。すべては元の測量単位斗で計算する。全部を百姓から徴収した。今度屯田軍の三千二百石の食糧と闊端赤の食糧はどこから徴収すべきでしょうか!」<sup>22</sup>。特に、「すべては元の測量単位斗で計算する」を特筆した。高麗がこれらの食糧を非常に重視する姿勢が伺える。一回目の日本遠征のために、高麗が集めた食糧である。二回目の日本遠征にあたって、食糧を集めるために、様々な方法を講じた。上記の内容は『兵誌』により詳しく記載されている。

<sup>20</sup> 『高麗史』巻27『忠烈王世家三』、元宗十五年正月。(原文：(元宗)十五年春正月，元遣总管察忽监造战艦三百艘，其工匠役徒一切对象，全委本国应副……兴役催督甚严……于交州道各为部夫，使征集工匠役徒三万五百余名，起赴造船所。是时，驿骑络绎，庶务烦剧，期限急迫，疾如雷电，民甚苦之)

<sup>21</sup> 『高麗史』巻27『忠烈王世家三』、元宗十五年二月甲子、原文：岁令供给，罔有期限，将无奈何! 兹实悯焉! 乞皆蠲免，以惠远人。

<sup>22</sup> 『高麗史』巻28『忠烈王世家一』、忠烈王三年二月丁卯。原文：小邦自至元七年以来，征讨珍岛、耽罗、日本大军粮饷，悉于百姓科收，尔后见在合浦镇边军、耽罗防护军、盐白州归附军并阔端赤，一年都支人粮一万八千六百二十九石二斗，马牛料三万二千九百五十二石六斗，皆以汉斗计。亦于百姓科收，今者所遣屯田军三千二百并阔端赤等粮料，更于何处索之!

忠烈王三年（1277）二月に、諸王百官から庶民まで、米を徴収し、洪茶丘軍の食糧に充てる…（中略）…八年（1282）四月、東征所用兵隊の食糧は十二万三千五百六十石余りに達した。九年（1283）二月に、各道に都に転送されていない食糧を全部軍隊の食糧に充てる。三月に、諸王百官及び工商業者、奴隸、僧侶から軍隊食糧を徴収した。諸王、宰樞、仆射米二十石；宰樞、三品の顯官米十五石；宰樞、三品の顯官或は四、五品の文、武官米十石；文武六品、侍衛護軍八石；文官、武官七八品參上解官六石；東班九品參外副使校尉南班九品四石；正雜權務隊正三石；東西散職業中僧一石；白丁抄奴所由丁吏諸司下典獨女官寺奴婢十斗；商人七石大戸；中戸五石；小戸三石。唯七十歳以上の男女から徴収してはいけない。<sup>23</sup>

この史料には高麗王朝が軍隊の食糧を集める為に、取らなければならない方法が記載されている。第一、この史料から、二回目の日本遠征の間に、軍隊の食糧を集める為に、高麗王朝の国王から、庶民まで皆定量の食糧を徴収し、前線の軍需を確保したことが伺える。第二、日本遠征は高麗社会のあらゆる面に損害をもたらし、すべての人に影響が出てしまったことがよく表明されている。一回目の日本遠征の前に、モンゴルの軍隊は高麗で駐屯し、食糧を生産し、軍隊の食糧準備のための高麗の負担を軽減した。二回目の日本遠征の前には、モンゴルの軍隊は駐屯しなかったから、高麗の王朝は国民を動員し、すべての国民が食糧を寄与した。第三、『高麗史』は特に「兵志」に、軍隊の食糧を集める問題について述べている。「世家」の部分に、軍隊の食糧など物資の供給が詳しく述べられていることを裏付けるものである。この部分の史実は注目すべきである。

『高麗史』巻29「忠烈王世家二」忠烈王六年（1280）十月戊戌条に、元中書行省の移牒を収録し、東征の軍事移牒を転載した。主に兵士の逃亡やその処置について検討する内容である。且つ文章は長くて、日本侵攻の過程の記載よりもはるかに長いことから、この問題の重要性がわかる一方、朝鮮王朝の史官が元王朝の問題を喜ぶ態度も伺える。六年十一月、中書省に上奏し、準備の状況を報告した。「弊国は兵戦九百艘、梢工水手一万五千人、正軍一万人を用意した。兵隊の食糧は漢の計量単位で表示する場合、十一万石、他の物資や機械なども数えられないほど用意した。全力を尽くし、聖恩に報いる。」<sup>24</sup>これは準備の事項を詳しく述べ、皇帝に忠誠心を表すための長編の上奏文である。この巻には、二つ極めて長い上奏文が収録され、高麗が日本遠征のために払った努力と代価を表現した。朝鮮王朝の史官から見れば、高麗の準備と貢献がなければ、元王

<sup>23</sup> 『高麗史』巻82『兵志二』（原文：忠烈王三年（1277）二月，令諸王百官以至庶民，出米有差，以充洪茶丘軍糧……八年（1282）四月，東征所支兵糧十二万三千五百六十余石。九年（1283）二月，命各道祿轉未輸京者悉充軍糧。三月，令諸王百官及工商奴隸僧徒出軍糧有差：諸王、宰樞、仆射、承旨，米二十石；致仕宰樞、顯官三品十五石；致仕三品顯官、文武四五品十石；文武六品、侍衛護軍八石；文武七八品參上解官六石；東班九品參外副使校尉南班九品四石；正雜權務隊正三石；東西散職業中僧一石；白丁抄奴所由丁吏諸司下典獨女官寺奴婢十斗；賈人大戸七石；中戸五石；小戸三石。唯年七十以上男女勿斂。）。  
<sup>24</sup> 『高麗史』巻28『忠烈王世家一』、忠烈王六年十一月己酉（原文：小国已备兵船九百艘，梢工水手一万五千名，正軍一万名。兵糧以漢石計者十一万，什物、機械不可縷数，庶几尽力，以報聖德。）。

朝の日本遠征は実現できない。高麗は単に日本遠征の先棒を担いだけであるが、高麗社会に対し、深遠かつ全面的な影響を持っている。

第三、『高麗史・忠烈王世家』は二回の日本遠征の経緯について、簡略に説明した。記載の史実は高麗の將軍を中心とした。

元十一年（1274）年十月、日本は元麗連合軍第一次の日本遠征を「文永の役」と呼ぶ。『高麗史・忠烈王世家』にこの戦争についての記述は数行しかない。

冬十月乙巳に、都督は金方慶を、朴之亮、金忻を知兵馬事、任豈を副使に任命する。金侁を左軍使、韋得儒を知兵馬事、孫世貞を副使、金文庇を右軍使、羅裕、朴保を知兵馬事、潘阜を副使に任命し、三翼軍と呼ばれる。都督は元の都元帥忽敦、右副元帥洪茶丘、左副元帥劉復亨などと一緒に、モンゴルや漢軍二万五千、我が軍八千、梢工と水手六千七百、戦艦九百艘余りを率いて日本を討伐し、一岐島に到達し、千人余りの敵を殺し、軍隊を分けて別々の道を進み、倭は退却した。残骸が累々とし、夕方になってようやく停戦した。夜、暴風雨に遭い、戦艦、巖崖に触れて大敗し、金侁が溺死した。<sup>25</sup>

元十八年（1281）、日本は元王朝の第二次遠征を「弘安の役」を呼ぶ。『高麗史・忠烈王世家』に今度の日本遠征についての記載は数行しかない。

七年五月戊戌に、忻都、茶丘及金方慶、朴球、金周鼎等は戦艦を率いて日本を討伐した。

癸亥、行省総把報：当月二十六日、諸軍は一岐島へ向かい、忽魯勿塔船軍一百十三人、梢手三十六人は暴風に遭い、方向を失った。郎将柳庇を派遣し、元王朝に事情を報告した。

六月壬申に、金方慶等は日本と戦って、三百人余りの敵を殺した。翌日再び戦闘し、範文虎は戦艦三千五百艘と十万余りの軍隊を率いて戦った。暴風雨に遭い、軍隊は全部溺死した。

八月己卯に、別将金洪柱は合浦から出発し、行宮へ東征群戦敗の知らせを報告した。元帥などは再び合浦に戻った。

同じ月に、忻都、茶丘、範文虎などが帰還し、元王朝の軍隊で犠牲になった数は十数万以上である。

---

<sup>25</sup> 『高麗史』卷28『忠烈王世家一』、即位年十月乙巳（原文：冬十月乙巳，都督使金方庆将中军，朴之亮、金忻知兵马事，任愷为副使；金侁为左军使，韦得儒知兵马事，孙世贞为副使；金文庇为右军使，罗裕、朴保知兵马事，潘阜为副使，号三翼军。与元都元帅忽敦、右副元帅洪茶丘、左副元帅刘复亨，以蒙汉军二万五千、我军八千、梢工引海水手六千七百、战舰九百余艘征日本，至一岐岛，击杀千余级，分道以进，倭却走，伏尸如麻，及暮乃解。会夜大风雨，战舰触岩崖多败，金侁溺死。）。

十一月壬午、各道は東征軍九千九百六十人、梢工水手一万七千二十九人を派遣し、生還者は一万九千三百九十七人しかない。<sup>26</sup>

二つの史料を総じて見れば、次の結論が得られる。

第一、簡略な記述は『高麗史・忠烈王世家』が日本遠征の戦争を重視していないことを裏付ける。あるいは、戦争の経過は注目される重要な歴史事件ではない。

第二、簡略な記述だが、どんな内容が記載されているかは注目すべきである。高麗の軍隊の将軍たちや制度整備の状況などが重点的に紹介された。初回の日本遠征において、八千人しかない高麗の軍隊は、左、中、右という三部分に分けて、それぞれの将軍によって指揮されたと記載されているが、元王朝の将軍については手短に触れただけである。人数から見れば、高麗の軍隊はごく一部しか占めていないが、『高麗史』においては、高麗の軍隊に重点を置いて記述されている。第二次の日本遠征の記述にも高麗の将軍たちを重点的に紹介し、日本遠征に参加した高麗の将軍たちの名前が紹介されただけでなく、本に記載される唯一の勝ち戦は高麗将軍金方慶が指揮した高麗の軍隊によるものであり、敵軍の三百人を殺した。元王朝の戦争状況については、敗戦しか触れていない。そして、「蛮軍」と呼ばれる范文虎が率いるモンゴルの軍隊に対し、軽蔑の意を表した。

第三、具体的な戦争状況についての記述は簡略であり、二回の敗戦にも「暴風」が言及された。初めての日本遠征には「一岐島に到達し、千人余りの敵を殺し、軍隊を分けて別々の道を進み、倭は退却した。残骸が累々とし、夕方になってようやく停戦した。夜、暴風雨に遭い、戦艦、巖崖に触れて大敗し」と記載されている。日本を討伐し、最初は勝ったが、夜からものすぎ暴風雨となり、「暴風雨」に負けた。いわゆる「神風」のことである。第二回に「暴風に遭い、方向を失っ」て、「暴風雨に遭い、軍隊は全部溺死した」。東征失敗の直接な原因ともいえる。

第四、二回戦争の記述とも、具体的な損失が言及された。史料の第一段落には、戦艦の大部分が沈没すること以外、左軍使「金侁が溺死した」事も特筆された。「金侁」は高麗の最高指揮官であった。後の『年表』には、「十月、金方慶と元の元帥忽敦、洪茶丘などは日本を討伐し、一岐で戦敗し、犠牲になった兵士は一万三千五百人以上」<sup>27</sup>。上記史料の第二段落に元軍の死傷状況に関するデータがたくさんある。そのデータは元軍の東征の死傷状況を明らかにした。後文の『年表二』に「元十八年、忠烈王七年五月ま

<sup>26</sup> 『高麗史』巻29『忠烈王世家二』（原文：七年五月戊戌、忻都、茶丘及金方慶、朴球、金周鼎等以舟师征日本。癸亥、行省总把报：是月二十六日，诸军向一岐岛，忽鲁勿塔船军一百十三人、梢手三十六人，遭风失其所之。遣郎将柳庇告于元。六月壬申，金方庆等与日本战，斩首三百余级；翼日复战，茶丘军败绩，范文虎亦以战舰三千五百艘、蛮军十余万来会，值大风，蛮军皆溺死。八月己卯，别将金洪柱自合浦至行宫，告东征军败，元帅等还至合浦。是月，忻都、茶丘、范文虎等还，元官军不返者，无虑十万有儿。十一月壬午，各道按廉使启：东征军九千九百六十名、梢工水手一万七千二十九名，其生还者一万九千三百九十七名）。

<sup>27</sup> 『高麗史』巻29『年表二』（原文：十月，金方庆与元元帅忽敦、洪茶丘等征日本，至一岐战败，军不还者万三千五百余人）。

で、金方慶と忻篤(都)、茶丘が日本を討伐し、覇家台で戦敗し、犠牲になった者は十万を超えた」<sup>28</sup>が記載されている。一回目の討伐の記述と類似し、短い、簡略であるが、冷淡な態度を明らかに表すともいえる。

以上のことから、『高麗王・忠烈王世家』のその戦争に関する記述において、高麗軍隊は主役であり、モンゴルの軍隊は単なる脇役にすぎず、日本の海戦も背景にすぎない。史料の選択は、『高麗史』の主体意識を明らかに表している。『高麗史』はこの戦争を全面的に記述するのではなく、高麗の軍隊の役割を示し、選択を経た書き方である。

### 三、『高麗史』日本遠征における高麗の将軍たちに関する記載

紀伝体の史書は人物をめぐって展開し、歴史事件の記述に人物の伝記が加わる。『高麗史』の人物紀伝はこの戦争に参加する将軍たちの一部分しか取り上げてない。主に、「金方慶伝」、金方慶の子金忻付の紀伝、その部下朴球付の伝記、「金周鼎伝」、「羅裕伝」や金文庇伝の附録「李貞伝」などである。その他に、例えば李蔵用、洪福源、趙彝有など関連人物の伝記もある。これらの伝記の中で、「金方慶伝」にこの戦争は詳しく記載されたが、他の人物の伝記はその戦争について簡単に触れただけであり、触れない者すらある。人物の生前の表現に基づいて、人物を肯定的に記述するものがあり、例えば「金方慶伝」である。反面の典型例もあり、例えば趙彝と洪福源は全部「叛逆伝」に編入される。よって、『高麗史』は強い政治的意図から、人物を選択し、記載している。

『高麗史』の「叛逆伝」は六巻からなる。序言は「孔子『春秋』を作る。尤も乱臣賊子及び地に據り以て叛する者を嚴にす。其れ誅死する者は而して貸(寛貸:刑罰をゆるくする)せず。後(世)に生きる者を戒める所以なり。夫れ人臣が忠順なれば則ち其の身栄え、其の宗族を保って、美名を後世に流(悼)す。叛逆者は未だ脂が鼎鐘(人を刑罰でかまゆでにするのに用いた)を潤さざること有らず。其の族を赤(誅滅)して其の(祭)祀を覆(顛覆)す者は戒めざる可けんや。叛逆伝を作る。」<sup>29</sup>『高麗史』において、元王朝に投降し、高麗に損害をもたらした人の多くは「叛逆伝」に編入された。例えば、東征の将軍の「洪福源伝」と「趙彝伝」は『叛逆伝』に編入された。趙彝は「科挙の殿試に合格し、進士となって叛逆し、元王朝に帰服し、秀才として、諸国の言語を理解できて、宮廷に通っている」。彼は軍隊を率いて高麗を討伐したことがない。『高麗史』によれば、彼はフビライに「高麗と日本は親交を交わし、元は日本へ使者を派遣した時に、高麗の人々に案内させる」と進言した。だから、高麗は使者宋君斐を元王朝の使者に同行

<sup>28</sup> 『高麗史』巻29『年表二』(原文:元至元十八年,忠烈王七年五月,金方庆与忻篤(都)、茶丘征日本,至覇家台战败,军不还者十万有奇)。

<sup>29</sup> 『高麗史』巻127『叛逆伝一』序(原文:孔子作《春秋》,尤严于乱臣贼子及据地以叛者,其誅死者而不貸,所以戒生者于后也。夫人臣忠順,則榮其身,保其宗,而美名流于后;叛逆者未有不脂潤鼎鐘,赤其族而覆其祀者,可不戒哉!作《叛逆傳》。)。)

させる。その後、何度も高麗を「中傷」したから、『高麗史』には「彝はいつも高麗を中傷し、不満が鬱積し死んだ」と記載されている。『高麗史』は高麗を「中傷」する人々を貶し、「金裕、李枢なども反逆者である」<sup>30</sup>と述べた。彼らを「叛逆伝」に編入し、「反人」という呼び方から、朝鮮王朝の史官がこれら金や権力のために国家を裏切った人々を恨むことが伺える。

洪福源は洪茶丘の父であり、「叛逆伝」に編入された。『高麗史』には洪茶丘伝がないが、「洪福源伝」の中に、洪茶丘の悪行が記載されている。洪福源はもと高麗の西京郎将であり、高宗二十年（1233）に、宣諭使鄭毅を倒す為に挙兵したが、失敗し、モンゴルへ逃げた。「福源は元王朝で東京総管を担当し、高麗軍民を率いて、四十余りの城を屈服させた。百姓たちも帰伏した。彼は高麗を中傷し、軍隊と一緒に高麗に行き来した…（中略）…一年後元王朝の兵隊が到達し、州郡を占拠した。すべて福源が導いた結果である。」<sup>31</sup>その後、洪福源は高麗の人質永寧公綽のモンゴル人の妻に失礼な行動を取ったから、死刑に処された。「家産を没収し、彼の妻と子茶丘、君祥等を拘束し福源の帰還を待つ。福源の子たちは父の死を悔やみ、高麗を中傷してまであらゆる行動を取った。」<sup>32</sup>元宗二年（1261）、フビライが即位した後、洪福源の冤罪を晴らし、彼の息子洪茶丘に父の職務を継承させた。「帰服した高麗軍隊と百姓を統率する総管である」<sup>33</sup>。それ以来、洪茶丘は元王朝の官僚であり、高麗の出身という点から、高麗の関連事務の処理を任された。洪茶丘は高麗に同情することもなく、いつも高麗を困らせるから、高麗の君臣たちは洪茶丘を恨んでいる。

高麗の国王忠烈王はかなり洪茶丘を憚っていた。彼はフビライに洪茶丘を元王朝に呼び戻してほしいと進言し、高麗に置いてはいけなと表明した。「洪茶丘がいる限り、国を治めにくい！洪茶丘は軍隊事務だけを担当すべきだが、国家政務まで勝手に口を挟んだ…（中略）…元王朝が軍隊を弊国に置くな、鞏都の軍隊或は漢軍を派遣してください。しかし、洪茶丘の軍隊は、呼び戻してください。」<sup>34</sup>忠烈王から見れば、洪茶丘が勝手に国政に介入し、独断専行するから、忠烈王は国を統治するすべもない。だから、自ら皇帝に洪茶丘を呼び戻してほしいと進言した。フビライは朝鮮国王に関連事項を注意したが、忠烈王は「それは洪茶丘の妄言である」と糾弾した。フビライは「茶丘だけでなく、多くの人がそう言った」と返した。フビライが「忻都はいかがだろう」と聞いたら、忠烈王は「忻都、鞏都人であり、彼を派遣してもいい。茶丘はいつも高麗の軍隊を中傷した。忻都を信じるしかない。洪茶丘と高麗の軍隊を呼び戻し、鞏都漢軍と

<sup>30</sup> 『高麗史』巻130『叛逆伝四、趙彝伝』（原文：有金裕、李枢者、亦反人也）。

<sup>31</sup> 原文：福源在元为东京总管，领高丽军民，凡降附四十余 城民皆属焉。谗构本国，随兵往来……然自是元兵岁至，攻陷州郡，皆福源导之也。

<sup>32</sup> 『高麗史』巻130『叛逆伝四、洪福源伝』（原文：籍没家产，械其妻及子茶丘、君祥等以归。福源诸子憾父之死，谋陷本国，无所不至。）。

<sup>33</sup> 原文：管领归附高丽军民总管。

<sup>34</sup> 『高麗史』巻28『忠烈王世家一』、忠烈王四年七月甲申（原文：然茶丘在焉，臣之为国，不亦难哉！如茶丘者，只宜理会军事，至于国家 之事，皆欲擅断……上国必欲置军于小邦，宁以鞏都汉儿军，无论多小而遣之，如茶丘之军，惟望召还）。

交替してください」<sup>35</sup>と答えた。よって、忠烈王にとって、洪茶丘が皇帝に讒言を告げるより、むしろ韃靼人忻都をもって洪茶丘に取って代わったほうがましである。高麗の国王と洪茶丘は犬猿の仲である。同時期、洪茶丘は耽羅を守っている。フビライはトラブルを防ぐ為に、忻都和洪茶丘を呼び戻した。高麗はこの時機に乗じて、耽羅を守るという任務を受け、さらに、耽羅を自分の支配に置く。東征の期間に、「元は洪茶丘を総管とし、戦船の建造を監督した。洪茶丘が徴用や監督を厳しく行い、各州道で部夫を任命し、職人などを徴用させる。各道で騒然とする。また、皇帝は洪茶丘に高麗の農業の指導を任せ、また洪茶丘を東征の副元帥に任命した。忠清道の梢工や水手が期間に遅れるから、洪茶丘は部夫を処罰し、大府卿朴暉を以て大將軍崔沔に取って代わる。」<sup>36</sup>この史料は元が高麗の人力や物資を徴用する事に触れたが、主に洪茶丘が戦争に乗じて高麗に危害をもたらした行為について記述する。彼は東征の副元帥であるが、高麗の利益を損害する一方で、達魯花赤よりも遥かにひどかった。洪茶丘のためには立伝していないが、洪福源伝の中に洪茶丘の行為を記述した。この伝記で、洪茶丘の行為の時代背景として、元王朝が高麗から物資等を徴用していることを記述した。洪茶丘を元王朝の人と見なしたにもかかわらず、洪茶丘を「叛逆伝」に収め、彼を叛逆として扱う。趙彝が「叛逆伝」に編入される理由と同じであり、朝鮮王朝の史官は国家の立場から、彼らを批判し、モンゴル帝国に降伏した高麗人を貶し、「反人」として「叛逆伝」に編入した。

洪福源、趙彝が『叛逆伝』に編入される反面、金方慶は肯定すべき対象として取り上げた。金方慶は兵部尚書翰林学士まで担当した。二回にわたる日本遠征において、金方慶は高麗の軍隊の最高責任者であり、その伝記は二回の戦争について詳しく描写している。一回目の東征について、「金方慶伝」は次のように述べた。

（元宗）十五年、皇帝は日本の征伐を企てて、方慶と茶丘に戦艦の建造を命じた。元の要求通りに戦艦を建造する場合、費用がかさみ、間に合わないから、全国国民が心配した。方慶…（中略）…は高麗船を建造した。其の年に、元宗が薨去し、忠烈王が即位し、方慶と茶丘は軍隊を率いず、一人で祝賀の意を表しに來た。方慶が合浦に戻り、都元帥忽敦、副元帥茶丘、刘复亨と一緒に戦艦の建造状況を確認した。方慶が中軍に、朴之亮、金忻が知兵馬事に任命され、任豈が副使、枢密院副使金旻が左軍使、韋得儒が知兵馬事、孫世貞が副使に任命された；上將軍金文庇は右軍使であり、羅佑、朴保が知兵馬事、潘阜が副使に任命され、三翼軍と呼ばれ、忻都が金印を授けられる。モンゴル軍隊や漢軍合わせて二万五千人、高麗の軍隊八千人、梢工や水手六千七百人、戦艦九百艘を率いて、合浦で女真族の軍隊を待つ。女真族の軍隊が着いたら、対馬島へ出発し、日本兵士をたくさん殺した。一岐島に至

<sup>35</sup> 『高麗史』卷28『忠烈王世家一』、忠烈王四年七月甲申（原文：忻都，韃靼人也，可則可矣。使茶丘在，則與高麗軍妄構是非，虽忻都不能不信，望令茶丘與高麗軍皆還于朝，以鞑靼漢兒軍代之。）。

<sup>36</sup> 『高麗史』卷130『叛逆伝四、洪福源伝』（原文：先是），以茶丘為監督造船官軍民總管。茶丘克期催督甚急，分遣部夫，使征集工匠，諸道騷然。帝又命茶丘提點高麗農事，又命為東征副元帥。茶丘以忠清道梢工水手不及期，杖部夫，使大將軍崔沔以大府卿朴暉代之。）。

り、倭の兵士が海岸で待っていた。之亮、方慶堦と赵朴は日本の軍隊を追い払った。日本の軍隊が投降を求めたが、再び交戦した。茶丘と之亮は千人余りの敵を殺し、戦艦を三郎浦に残し、軍隊を分けて別々の道を進み、多くの敵を殺した。日本の軍隊が急に現れ、中軍と交戦し、方慶は両手に剣を握り、退却せず、矢を出して大声を出し、倭人は退却した。之亮、忻、朴、李唐公、金天禄、申奕などが奮戦し、倭人の軍隊は大敗し、残骸が累々とした。忽敦は：「モンゴル人は戦いに長けているが、ここまでとは思わなかった！」諸軍隊と戦い、夕方になってようやく停戦した。方慶は忽敦と茶丘に「兵法によれば、千里県軍の意気込みは食い止められない。我が軍隊の数は少ないが、敵の土地に立ち、兵士たちは自分のために戦い、まるで孟明が船を焼却したごとく、背水の陣を敷いて戦った」と言った。忽敦は「兵法において、敵の実力を軽視し、自分の戦果を過大評価し、疲れた兵隊を率いて大量の敵と戦うことは、最善な戦略ではない。取り敢えず軍隊を率いて帰った方がいい。」と言った。复亨は矢に刺されて、先に船に乗り、軍隊を率いて帰った。その夜に、暴風雨に遭い、戦艦は巖崖に触れて大破し、金佐が溺死した。合浦で奪い取った兵器などを皇帝や国王に捧げ、国王は枢密副使の張鑑を派遣し軍隊を慰労し、方慶に先に戻ると命じた。そして方慶を上柱国判御史台事に任命した。<sup>37</sup>

第二次日本遠征の状況については、『金方慶伝』で次のように述べている。

「七年三月、日本遠征へ出発した。方慶は先に義安軍に軍隊を検閲し、後で国王も合浦に来て諸軍隊を検閲した。方慶と忻都、茶丘、朴球、金周鼎などが出発し、日本の世界村大明浦に到達し、檄文を以て通事に知らせる。周鼎先は倭人の軍隊と交戦し、諸軍隊も戦場に加わり、郎将康彦(康師子)等が死んだ。六月、周鼎、球、朴之亮、荆万户等は日本の軍隊と交戦し、三百人以上の敵を殺した。日本の兵士が急に攻め込み、官軍を破り、茶丘は馬を捨てて逃げた。王万户は横から進攻し、五十人余りの敵を殺し、日本の軍隊が退却して、茶丘は命が助かった。翌日再び戦ったが、戦敗した。軍隊の中で疫病が広がり、死者は三千人を超えた。忻都、茶丘などは戦況は不利であり、かつ范文虎は時機を遅れたことを考慮に入れ、軍隊の撤退を議論した。「勅命によれば、江南軍と東路軍を派遣し、其の月に一歧島に到達す

<sup>37</sup> 『高麗史』卷 104『金方慶伝』（原文：（元宗）十五年，帝欲征日本，诏方庆与茶丘监造战舰。造船若依蛮样，则工费多，将不及期，一国忧之。方庆……用本国船样督造。是年元宗薨，忠烈即位，方庆与茶丘单骑来陈慰，还到合浦，与都元帅忽敦及副元帅茶丘、刘复亨阅战舰。方庆将中军，朴之亮、金忻知兵马事，任恺为副使，枢密院副使金佐为左军使，韦得儒知兵马事，孙世贞为副使；上将军金文庇为右军使，罗佑、朴保知兵马事，潘阜为副使，号三翼军，忻即绶也。以蒙汉军二万五千、我军八千、梢工引海水手六千七百、战舰九百余艘，留合浦以待女真军，女真后期。乃发船入对马岛，击杀甚众。至一歧岛，倭兵陈于岸上，之亮及方庆堦赵朴逐之，倭请降，复来战。茶丘与之亮、朴击杀千余级，舍舟三郎浦，分道而进，所杀过当。倭兵突至，冲中军，长剑交左右方庆如植，不少却，拔一啸矢，厉声大喝，倭辟易而走。之亮、忻、朴、李唐公、金天禄、申奕等力战，倭兵大败，伏尸如麻。忽敦曰：“蒙人虽习战，何以加此！”诸军与战，及暮乃解，方庆谓忽敦、茶丘曰：“兵法：千里县军，其锋不可当，我师虽少，已入敌境，人自为战，即孟明焚船淮阴背水也，请复战。”忽敦曰：“兵法小敌之坚，大敌之擒，策疲乏之兵，敌日滋之众，非完计也，不若回军。”复亨中流矢，先登舟，遂引兵还。会夜大风雨，战舰触岩崖多败，佐堕水死。到合浦，以俘获器仗献帝及王，王遣枢密副使张鑑慰谕，命方庆先还，加上柱国判御史台事）

ると見込んでいる。今南軍はまだ着いてないが、我が軍隊が先に到達し、数回も戦って戦艦や食糧を大量に消耗した。どうするべきだろう？」という。方慶は黙り込んだ。十日以上経ったが、議論は進展を遂げていない。方慶は「勅命により、三ヶ月の食糧を用意したが、今は一ヶ月の食糧がまだ残っている。南軍が進攻する時を待って、必ず敵軍を破る。諸将軍は異議を出す勇気がない。その後、文虎が十万以上の軍隊や九千艘の船を率いて到達した。八月、暴風に遭い、蛮軍は全部溺死した。朝夕で死体は浦に流れて浦を塞いだ。死体を踏んで浦を通ることもできる。遂に軍隊を撤退した。」<sup>38</sup>

この二つの史実に対する描写は、東征の戦場のもう一つの姿を明らかにしている。幾つの特徴がある。第一、元王朝の東征の記載の中で、『高麗史』における最も詳しい史料であり、「忠烈王世家」の記載より詳しいし、細部の記述がたくさんあってより具体的である。この歴史の記述は、金方慶を中心に展開し、金方慶の戦功と勇ましい行いを浮き出させている。それ故、金方慶を中心に、彼の言行を記述する事により、この戦争で行動を表現することがこの史料の本筋である。前述したように、金方慶は高麗の有名な将軍であり、立派な家柄をもち、輝かしい戦功を建てた。この二回にわたる戦争から、金方慶が勇敢で戦争に詳しく、重責に適う人材であることが伺える。

第二、この史料では、金方慶がまるで戦争の決め手のようである。第一次戦争が激しい時に、金方慶「矢を出して大声を出し、倭人が退却した…（中略）…倭人の軍隊を大敗させ、残骸が累々とした」、モンゴルの元帥も「モンゴル人は戦いに長けているが、ここまでとは思わなかった！」と言って彼を褒めた。戦争状況が有利であって、彼は勝利に乗じて追撃するように勧めたが、採用されず、暴風雨に出合って兵船が沈没して戦敗した。第二次討伐の時も、金方慶が高麗軍隊を指揮し、「三百人余りの敵を殺し」勝利を納めた。モンゴルの軍隊は何度も失敗した。洪茶丘甚至仅以身免、最終“暴風に遭い、蛮軍は全部溺死した。朝夕で死体は浦に流れて浦を塞いだ。死体を踏んで浦を通ることもできる。”これらのことから、戦争が如何に激しかったかが伺える。このような比較法を以て、金方慶の戦功を浮き彫りにした。

第三に、この史料は『高麗史』の他の史料と同じであり、高麗の軍隊の戦場での様子を表している。『高麗史』だけでは戦争の状況を全面的には把握できない。高麗の軍隊に関する内容は朝鮮王朝当局が作り出したものであり、大げさで、作り話とも疑われる。

---

<sup>38</sup> 『高麗史』巻104『金方慶伝』（原文：七年三月，出師東征。方慶先到义安军阅兵仗王至合浦，大阅诸军。方庆与忻都、茶丘、朴球、金周鼎等发，至日本世界村大明浦，使通事金贮檄谕之。周鼎先与倭交锋，诸军皆下与战，郎将康彦（康师子）等死之。六月，方庆、周鼎、球、朴之亮、荆万户 等与日本兵合战，斩三百余级。日本兵突进，官军溃，茶丘弃马走，王万户复横击之，斩五十余级，日本兵乃退，茶丘仅免。翼日复战，败绩。军中又大疫，死者凡三千余人。忻都、茶丘等以累战不利，且范文虎过期不至，议回军，曰：圣旨令江南军与东路军必 及，是月望会一歧岛，今南军不至，我军先到数战，船腐粮尽，其将奈何？方庆默然。旬余，又议如初。方庆曰：奉圣旨，赍三月粮，今一月粮尚在，俟南军来合攻，必灭之。诸将不敢复言。既而，文虎以蛮军十余万至，船凡九千艘。八月，值大风，蛮军皆溺死，尸随潮汐入浦，浦为之塞，可践而行。遂还军。）

実際に、史料の偏っている表現を無視して、戦争の立場から見れば、元王朝が戦争を起こし、高麗はやむを得ず元の先棒を担いだけである。高麗の軍隊は単なる補助的な役割を果たしていて、戦争の勝負を決めわけがない。従って、『高麗史』の一部の内容は大げさであり、作り話の部分すらある。例えば、金方慶と元帥の対話は本当の話だとは考えられない。朝鮮王朝の歴史の編集者が、これらの会話を知るわけがない。たとえ高麗王朝が関連の書類や資料を残していても、そんな対話が記録されるわけがない。従って、合理的な想像を通じて、金方慶の戦争での重要性を誇大し、彼を輝かしく表現している。『高麗史』の関連記述には、多少このような大げさな部分がある。

総じて、『高麗史』は高麗に忠実であるかどうかを人物の判断基準とする。たとえ高麗が元王朝の藩属国であっても、『高麗史』は高麗を裏切って元王朝に降伏した人を「反人」と見なし、「叛逆伝」に編入する。金方慶は日本遠征で高麗の最高将軍であり、高麗東征の代表人物、英雄の模範として仕上げた。金方慶の伝記において、金方慶を中心に朝鮮史官は合理的な想像による金方慶との対話を通じて、モンゴルの東征をより立体的なものにし、金方慶が東征の戦争の決め手であるというイメージを作った。モンゴルの将軍は失敗の象徴で、東征の失敗に主な責任を負うべきだとした。

#### 四、終わりに

朝鮮王朝の官撰史書『高麗史』は、章節「忠烈王世家」と「金方慶」で、元の日本遠征の二つの類似して少し異なる姿を表わした。基本的な主旨は同じであり、高麗王朝のこの戦争における貢献を浮き彫りにし、高麗の将軍の戦功を宣伝した。『高麗史』によれば、高麗はこの戦争の決め手であり、元王朝の元帥が高麗の将軍の進言を聞かないから、暴風雨に遭い、戦敗したとする。誠にフランスの歴史学者ミシェル・ド・セルトーが述べた通り、官撰の歴史の編纂は国家理性によって成し遂げたものである。「現存の材料に基づいて、専門の手法を以てある「環境」における諸要素を「処理」し、緻密な記述を作り上げた。」<sup>39</sup>従って、この史料は朝鮮王朝の史官によって構築されたものであり、明王朝が編纂した『元史』や日本の関連史書の記載とは大きく異なる。

『高麗史』と『元史』を比べたら、様々な相違点に気付くはずである。例えば、洪茶丘が金方慶を誣告する案件について、『高麗史』には金方慶は功績を上げて賞賜を貰い、朝廷の官員たちに排除され、叛逆の罪と誣告され、「（洪）茶丘は高麗を憎んでいて、高麗を中傷しようを企てた。方慶を陥れることを聞いたら、中書省に調査を依頼する。」<sup>40</sup>洪茶丘は様々な手を講じて、金方慶を迫害しようとした。金方慶は苦しめられ、フビライは尋問した後に、金方慶のでっち上げの罪名を晴らした。『元史・高麗

<sup>39</sup> (フランス) ミシェル・ド・セルトー、『歴史のエクリチュール』、倪復生訳、北京：中国人民大学出版社、2012年、第11ページ。

<sup>40</sup> 『高麗史』巻104『金方慶伝』（原文：洪茶丘与本国有宿憾，欲伺衅嫁祸，闻方庆事，请中书省来鞫。）。『高麗史』

伝』には「十四年正月、金方慶などが反乱し、皇帝は確信し反乱を鎮圧するように命じたが、また忻都、洪茶丘に軍隊を整えさせた」<sup>41</sup>と記載されている。この伝記では金方慶を反乱と見なし、『高麗史』では洪茶丘が金方慶を罪に陥れる。両者は正反対の見方を示している。『高麗史』と『元史』において、様々な記述は矛盾していて、金方慶案件は典型的な例である。『高麗史』において、金方慶は重臣と見なされ、彼のために立伝したが、『元史』に金方慶は反乱の容疑者とみなされた。洪福源は『元史』に功臣と見なされたが、『高麗史』の「叛逆伝」に編入された。

このような大きな違いに我々は注意しなければならない。いかに東アジア三国に及ぶ歴史事件を扱うべきか、いかにそのような問題を防ぐべきか、或は以下に史書における作り話をいかに分析すべきかなどは一国の立場と角度から歴史を判定してはいけない。<sup>42</sup>史料を扱う時、陳寅恪が「他国の旧典を以て我が国の旧典を補うべきだ」<sup>43</sup>と指摘した。より重要なのは、国と民族の枠から脱却し、一国史の束縛から脱して、東アジアの立場から全体を眺めたとき、初めて歴史の真相に近づくことが可能になるのである。

---

<sup>41</sup> 『元史』巻 208『外夷一・高麗』第 4620 ページ。北京：中華書局、1976 年（原文：十四年正月，金方慶等为乱，命愷治之，仍命忻都、洪茶丘饬兵御备）。

<sup>42</sup> 葛兆光は『「一国史」と「東アジア史」の間に：13～16 世紀東アジアの三つ歴史事件を例として』（『中国文化研究』2016 年冬の巻）に「一国の歴史の立場、角度から東アジアの歴史を観察すれば、「死角」や「盲点」があるかもしれないから、一国の歴史ではなく、東アジアの立場から、これらの歴史事件を見直すべきだ。」

<sup>43</sup> 陳寅恪、『王静安先生遺書序』、許冠三を参照に、『新史学九十年』（長沙：岳麓書社、2003 年），第 83 ページ。